2026年04月11日 中日新聞 19頁

ようこそ研究室へ

人はなぜ犯罪に手を染めるのか。「犯罪心理学」が専門で、中でも犯人しか知らない情報を容疑者から引き出す「隠匿情報検査」を研究する東海学園大心理学部犯罪心理学ゼミの本間洋充教授（58）は、警察で長年実績を積んだスペシャリスト。名古屋市天白区のキャンパスにある研究室を訪ね、謎めいた研究の秘密を聞いた。（服部桃）

科捜研出身 犯罪心理を探る

東海学園大心理学部 本間洋充教授

真実とウソ 科学で見抜く

研究室には、あおり運転に関する研究のためにドライビングシミュレーターが設置されている

―本間さんのゼミでは、どんな研究をしているのですか。

うそを発見するとか、うそに絡めた研究をやっています。隠匿情報検査のよりどころは、人体に起きる生理反応を基にした生理心理学ですが、いろいろな方法があっていい。社会実装を目指すという点では、今の警察の捜査に還元できるような研究ができたらと思っています。具体的には、会話中の身体反応からうそを見つけるとか、聞くバイトなどのうそに引っかかりやすい人の特性の研究などが挙げられます。

本年度は3、4年生計約20人が所属しています。事件の目撃証言に「現場に赤など目立つ色がある」といった色彩情報が及ぼす影響や、交通事案の中でも悪質な犯罪行為であるあおり運転について研究している人がいます。みんな早い段階で犯罪心理学に興味を持っていたようでこのゼミの存在が受験の決め手になったという学生もいます。

卒業後はメーカーの営業職やサービス業など人と接する仕事に就く学生が多く、警察官になった女性もいます。卒業までに「真実とうそを見分けるセンス」を学んでほしいと思っています。

―心理学に関心を持ち、愛知県警察に入ったきっかけを教えてください。

音楽が好きで、高校生の頃に、音や音楽が人の感情や心に及ぼす影響に興味が湧きました。学生時代は知覚心理学の分野を研究し、音がどこで鳴っているかの判断が目からの情報に引っ張られることを突き止めました。

今でこそ証拠の鑑定や研究をする警察の科学捜査研究所（科捜研）は知られていますが、当時の一般的な知名度はほぼゼロ。でも恩師から採用情報を聞き、横溝正史の推理小説「金田一耕助」シリーズが好きで、事件や犯罪に興味があったことや「研究所」という響きに引かれたこともあって応募しました。科捜研にはミステリー好きが多いと思います。

―科捜研では、ポリグラフ検査を担当していたそうですね。今の研究室でも使うことはあるのですか。

ポリグラフ検査機は「うそ発見器」と言われることもありますが、厳密に言えばうそを見つけるわけではありません。容疑者に事件について質問し、生理反応の大きさを、図器なら図器に関する質問同士で比較することで、犯人しか知り得ないことを知っているか確かめます。

検査では、被験者の指先やおなかの周囲にセンサーを取り付けます。例えば、質問の中で実際に事件で使われた凶器が提示されると、犯人ならばまず汗腺活動が活発化し、皮膚表面のコンダクタンス（電気伝導率）が上がります。次に心拍数が低下したり、呼吸パターンが変わったりします。反応が出やすいところは人によって違うので、いろいろな指標を使って調べます。

今も研究には使っています。ただ、警察と違って、研究現場に容疑者はいません。ポリグラフ検査の呼吸反応には、情動（一時的な感情）が絡むこともあり、犯人のようなリアルな必死さが実験室で再現できないのが一番難しいところです。

―犯罪心理学の研究には、どんな人が向いていますか。

犯罪心理学の面白さは、世の中で起きていることに直結していて、そこに貢献できるかもしれないところにあります。向いていると思われるのは、社会で起きているいろいろな出来事や問題に興味を持てる人。いわゆる「ネット社会」だけではありません。学生には、新聞を読みなさいと言っています。

興味のあることについて、実際にどのように条件を設定したらデータが取れるか考えられるような、実験のセンスがある人もいいと思います。難しい話ではありません。中学生の理科の実験レベルで大丈夫です。

皮膚電気反応や心電図を測るポリグラフ検査機を指や手首などにつける東海学園大の本間洋充教授＝いずれも名古屋市天白区の同大で

ほんま・ひろみつ　愛知県岡崎市出身。名古屋大学院文学研究科で修士（心理学）を取得。同県警察本部の科学捜査研究所に31年間勤務し、2023年から現職。専門は司法・犯罪心理学、捜査心理学など。趣味はベースギターの演奏とお酒を飲むこと。旧型ポルシェに乗ること。ネコ2匹と妻と暮らす。

ゼミの後で

ロックな趣味と柔和な語り口

心理学関連の書籍がずらりと並んだ研究室で、異彩を放っていたのがベースギター。高校時代に、自主制作映画の劇音楽を作ったこともあるそうだ。学生の頃からロックバンドを組み、科捜研時代にはライブハウスで演奏。10年ほど前に再結成したバンドが、今も続いているという。

取材時は金髪だったが、ピンク色に染めていた時期も。髪の色や、レザージャケットを着こなすスタイリッシュな姿に、研究者のイメージが覆された。柔らかい語り口もあって、どんな話も受け入れてもらえそうな気持ちにもなった。「真実とうそを見分けるセンス」は、今の世の中を生き抜くために必要な武器。4年目を迎えるゼミから、どんな人材が生まれるのか楽しみだ。

＊中部地方にある特徴的な研究室を訪問し、どんな研究をしているのか、その研究にどんな意義があるのかなどを聞いていきます。

毎月第2土曜に掲載します

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています